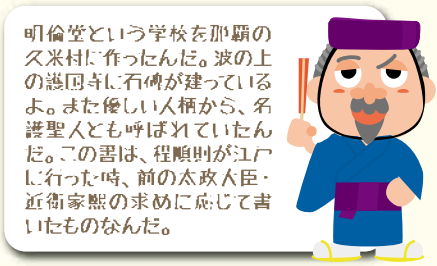
県指定有形文化財（昭42.4.11）

程順則の書

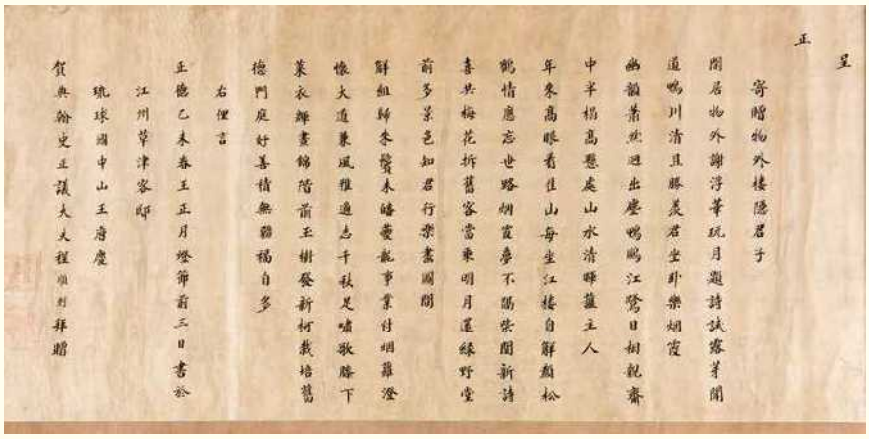
1巻 縦44.0cm 横343.5cm



書跡典籍 文人・政治家、程順則の書跡

太政大臣近衛家熙への書状（一部）

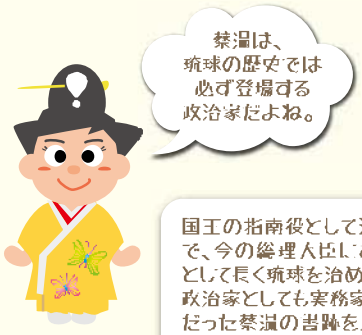
程順則の落款

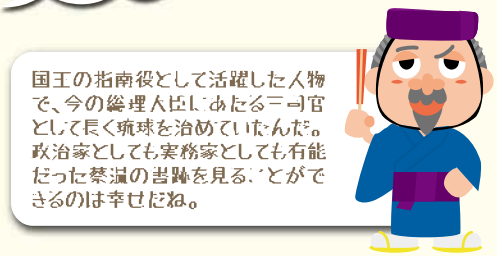


程順則（1663～1734年）が1715（康熙54）年に江戸立ちから帰る途中、前の太政大臣近衛家熙に贈った書の控えです。純白で光沢のある絹に書かれた詩文の巻物で、名護聖人と呼ばれた学者の面目を示す整った筆跡です。

程順則は名護親方寵文とも言い、久米村の程氏7世で、たびたび中国に渡り学問をおさめ、1706（康熙45）年に進貢正議大夫として福建省に渡り、1708（康熙47）年に『六諭衍義』と『指南広義』を自費で発行しました。その後、『六諭衍義』は薩摩を経て徳川八代将軍吉宗に献上され、和訳されて江戸時代の庶民教育のテキストとして広く用いられました。『指南広義』は、那覇と福州の間を航海する方法を教授する本です。

彼は詩文にも優れ、『雪堂燕遊草』（1698年）などの漢詩集も発行しました。また、程順則の提案により、1718（康熙57）年に琉球における最初の正式な教育機関として、明倫堂が久米村の孔子廟境内に設立されました。



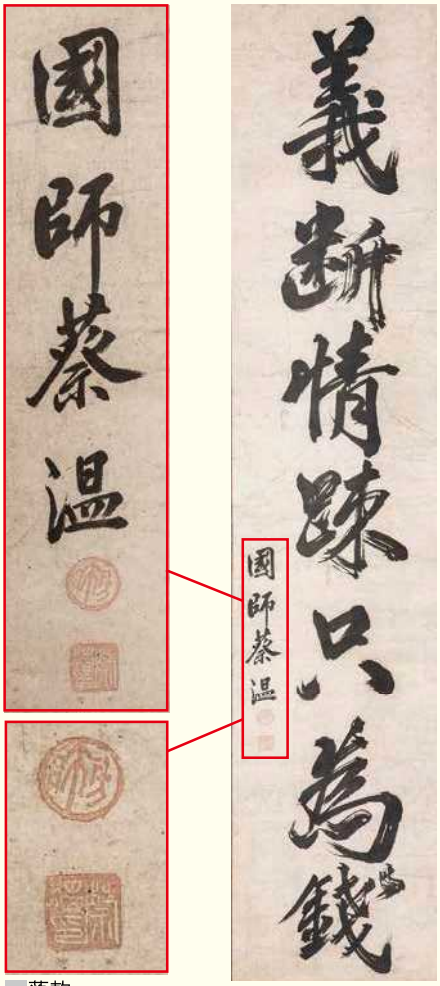


県指定有形文化財（昭42.4.11）

蔡温の書

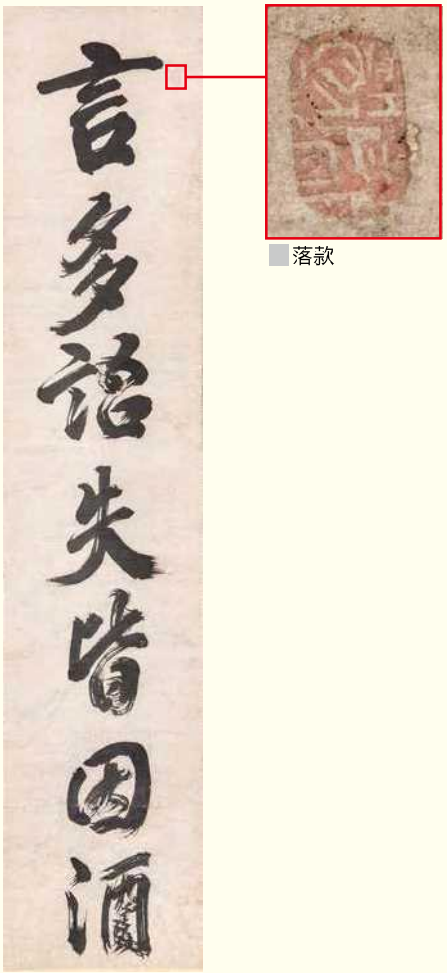
2幅 縦135.0cm　横28.3cm

書跡典籍　名政治家蔡温の、沖縄に残された唯一の書



落款

「義を断ち情疎きは只銭の為なり」



落款

「言多く語失うは皆酒に因る」

伊江御殿に保存されていた書で、蔡温（具志頭親方文若・1682～1761年）の作品として現存する唯一のものです。

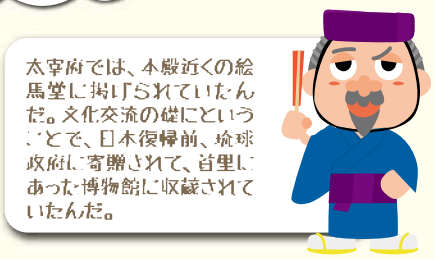
蔡温は、蔡鐸の次男として久米村に生まれました。1708（康熙47）年に中国福州に渡り、2年間滞在して陽明学者から教えを受け、実学を学びました。帰国後は尚敬王の師匠となり、のちに三司官の位まで昇りつめました。特に、林業、農業に力を入れて取り組み、儒教道徳の確立にも画期的な功績を残しています。また、蔡温には、政治、経済、儒学、哲学等多様なジャンルにわたる18冊の著書があります。

この作品の「言多く語失うは皆酒に因る」、「義を断ち情疎きは只銭の為なり」は、実学政治家である蔡温にふさわしい内容の対句であり、堂々とした趣で気品にみちた行書で書かれています。

県指定有形文化財（平元.9.29）

扁額徳高 鄭元偉書

1面 内法 縦124.8cm 横310.0cm 厚4.3cm　外法 縦185.0cm 横370.0cm



書跡典籍 大宰府から戻ってきた名書家・鄭元偉の書

扁額徳高　鄭元偉書

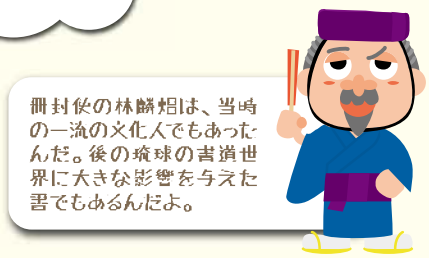
落款「鄭元偉印」「長烈」

落款「通徳堂」

鄭元偉（1792～?）は唐名で、和名では湖城親方長烈、雅号を善橋と言い、19世紀中期の沖縄の代表的な書家の一人です。父の鄭嘉訓とともに薩摩藩主から厚い待遇を受けて、多くの優れた書を残しました。また、北京への陳情使や江戸への慶賀使に随行したこともあり、中国や日本の古典への学識が深く、特に漢字の楷書に優れていたとされます。

扁額「徳高」は1852（威豊2）年の作品で、太宰府天満宮に奉納されたものでしたが、1969（昭和44）年に太宰府天満宮から琉球政府に寄贈されました。現在は、沖縄県立博物館・美術館に所蔵されています。

扁額の材質はケヤキの一枚板で、縁は瑞雲をかたどっています。文字には、金箔が施されていたと思われます。鄭元偉の書（楷書）の特徴である力強い筆づかいがよく表れており、沖縄書跡の代表的な作品と言えます。



県指定有形文化財（平元.9.29）

扁額凌雲 林麟焻書

1面 寸法　縦32.5cm　横130.6cm 厚2.0cm

書跡典籍 王家の別荘に伝わった冊封使の貴重な書

金箔を施された大文字「凌雲」

落款

扁額凌雲　林麟火昌書

落款

賛の部分の拡大

林麟焻（字：石来）は福建省甫田の出身で、1683（康熙22）年に冊封使汪楫の副使として琉球に来ました。明史の編集にもたずさわり、『玉巌詩集』『竹香詞』などの著書があります。

沖縄の扁額や書軸の中には、冊封使一行によって作られたものが多くあります。琉球の士族達は、中国人の書を好んで鑑賞しました。このような状況が、沖縄の書道の発展に大きな影響をもたらしたと言われています。

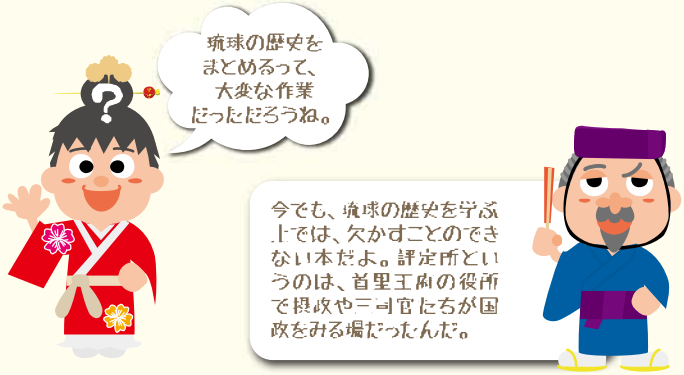
扁額「凌雲」は、元々王家の別邸御茶屋御殿（崎山御殿）に掲げられていました。イヌマキ（チャーギ）の板に漆を塗り、大文字の「凌雲」には金箔が施され、左側に説明文が彫られています。

現存する冊封使関係の書の中でも代表的な作品であり、沖縄の書道史を知る上で貴重な書跡です。

県指定有形文化財（昭31.12.14）

評定所格護定本 中山世鑑

6冊 縦30.5cm 横21.2cm



書跡典籍 羽地朝秀が編集した琉球で初めての歴史書

評定所格護定本　中山世鑑

琉球の創世神話

系図

尚巴志の記事

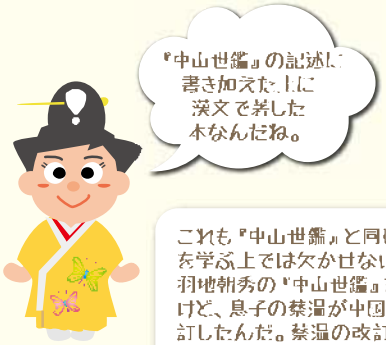
羽地朝秀（向象賢・1617～1675年）が、1650（順治7）年に王命によって編さんした琉球王府最初の正式な歴史書です。

書名の「中山」は琉球のことであり、「世鑑」は「殷鑑遠からず」の故事からとったもので、「後世の国王や臣下がこれを鑑とするように」という意味で名付けられています。

序文には、「尚質王が摂政の金武朝貞、三司官の大里良安、宜野湾正成、国頭重仍に命じ、博古の旧僚を会し、その討議を経て、向象賢がこれを書いた」と記されています。

本文は「琉球開闢之事」から書き始め、舜天王を王統の初代とし、英祖紀、尚巴志紀、尚円紀を経て尚清紀で終わっています。尚真王に関する記録が本巻に無いことは大きな謎となっています。

序文と総論は漢文で、本文5巻は和文で書かれています。第一代の舜天については『保元物語』からの引用で源為朝の子であるとし、これが歴代の史書にも受け継がれました。



県指定有形文化財（昭31.12.14）

評定所格護定本 中山世譜

19冊 縦31.2cm 横21.2cm

書跡典籍 漢文で書かれた二種類の琉球国正史

歴代国王の記録と王統図

『蔡温本』

『蔡鐸本』

『中山世鑑』に続く琉球の正式な歴史書の一つで、蔡鐸本（7巻7冊）と蔡温本（14巻12冊）の2種があります。

蔡鐸本は『中山世鑑』を蔡鐸が漢訳補訂したもので、正巻5巻、琉薩往復関係1巻、附巻1巻の7巻から構成されています。1697～1701（康熙36～40）年にかけて、編集が行われました。

補訂の内容は、『中山世鑑』で欠落していた尚真王代の記述を加えたこと、『保元物語』や金石文からの引用を除いたこと、中国皇帝からの詔勅や文書を多く取り入れていること、尚元王から尚益王までの記事を書き加えたこと、さらに琉球・薩摩関係の記事を1巻にまとめたことなどです。

蔡温本は、父である蔡鐸の後を受け継いでさらに改訂を加えたものです。蔡温による編集は1724～1725（雍正2～3）年にかけて行われましたが、その後1876（光緒2）年まで書き継がれています。

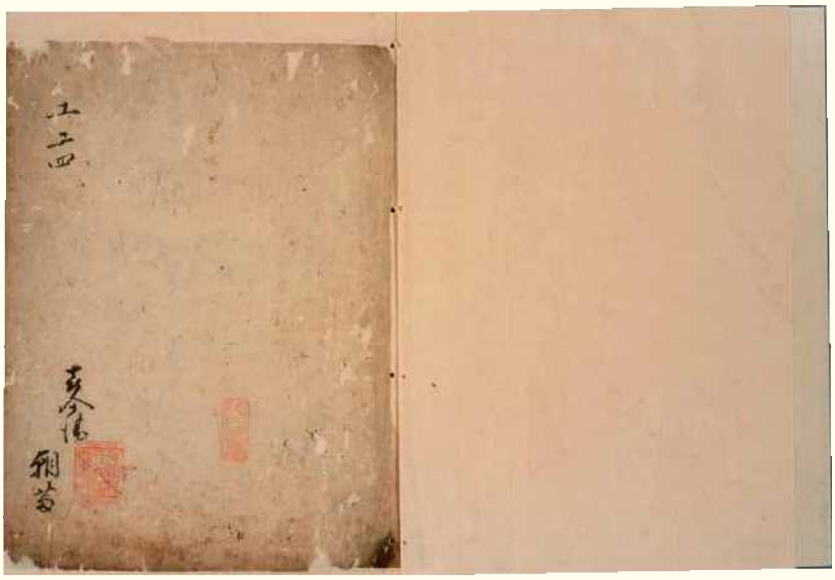
正巻には主に中国関係、附巻には江戸参府、薩琉関係の記事が収録されており、史料的価値も高く評価されています。本文には、史実だけでなく、蔡温自身の意見も書かれており、彼の考え方を知ることが出来ます。

県指定有形文化財（昭33.1.17）

屋嘉比朝寄作 工工四

1冊 縦31.2cm 横21.3cm

書跡・典籍 工工四を考案した屋嘉比朝奇



屋嘉比朝寄作　工工四

もくじ

御前風説

屋嘉比親雲上朝寄（1716～1775年）は、その美しい声と才能が認められ、若くして尚敬王の命令で薩摩に派遣され、謡曲と舞を学びました。しかし、帰国後に眼の病気にかかって失明し、三線音楽に転向しました。

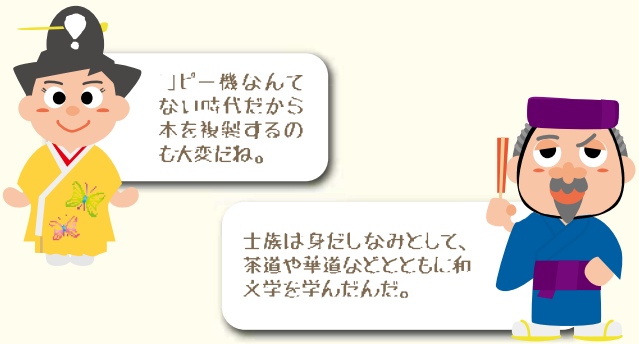
屋嘉比は、湛水親方から受け継いだ従来の歌唱法に改良を加えて新しい楽風を作り上げました。更に、従来の口伝のみに頼る伝授方法が誤記や忘失をまねくことを恐れて、中国の記譜法を参考にして「工工四」という三線音楽記譜法を考え出しました。工工四は、特定の漢字で旋律の符号を連ね、側に歌詞を書き記すもので、本巻には117曲が収録されています。彼が考案した工工四は、琉球音楽の正しい継承と発展の基礎を築きました。

『屋嘉比朝寄作工工四』は、琉球大学図書館ホームページの琉球・沖縄関係資料デジタルアーカイブで画像を閲覧することができます。

https://www.library.pref.okinawa.jp/archive/in-dex.html

【収蔵機関】琉球大学附属図書館

（写真提供：琉球大学附属図書館）

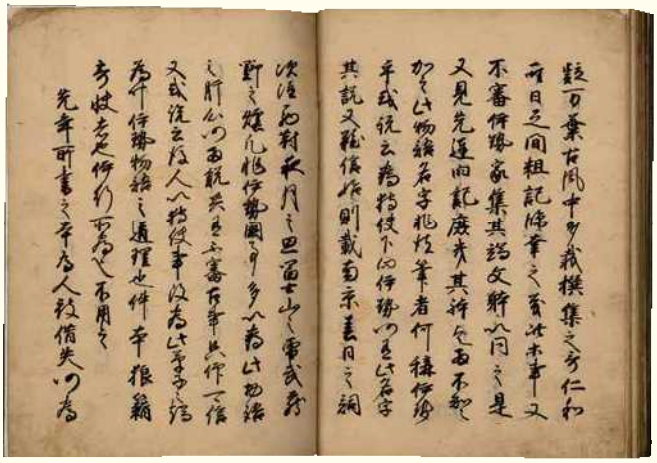


県指定有形文化財（昭49.10.3）

浦添家本伊勢物語

1帖 縦24.8cm　横17.3cm

書跡典籍　首里士族の教養の高さを知ることのできる一冊



伊勢物語　芥川

芥川（あらすじ）
男が長年思い続けた女を盗み、芥川のほとりまで逃げた。激しくなった雷雨を避けるため蔵に隠れて夜明けを待つが、女を鬼に食べられてしまう。女がいないことに気づいた男は泣き悲しむ。

伊勢物語　筒井筒

筒井筒（あらすじ）
筒井筒（丸い井戸の竹垣）でたけくらべをして遊んでいた幼なじみの男女。互いにひかれあい、ついに念願かなって結婚することができた。妻の親が亡くなると、夫は他の女の元に通うようになる。

この本は伊勢物語の写本であり、浦添御殿（浦添王子朝熹の家）に伝えられたものです。浦添王子は尚育、尚泰時代の代表的な文化人で、琉球三十六歌仙の一人です。

字体、紙質、装丁に室町中期の古写本の特徴がみられます。奥書などから、夢庵・釈肖柏の自筆本『伊勢物語肖聞抄』からの転写であることがわかります。また末尾に戸部尚書（藤原定家）の長い後書きが記されており、定家本の系統であることがわかります。

1711（康熙50）年に編さんされた『混効験集』に14箇所の引用があることから、『浦添家本伊勢物語』の琉球への伝来は、1700年代初頭以前と考えられます。沖縄における和文学の受入れの形態や歴史を考える上で、貴重な資料です。

『浦添家本伊勢物語』は、琉球大学図書館ホームページの琉球・沖縄関係資料デジタルアーカイブで画像を閲覧することができます。
https://www.library.pref.okinawa.jp/archive/in-dex.html

（写真提供：琉球大学附属図書館）

沖縄戦と文化財

ためになるかも！？ちょこっとコラム

沖縄は沖縄戦により、壊滅的と表現されるほどの被害を受けました。

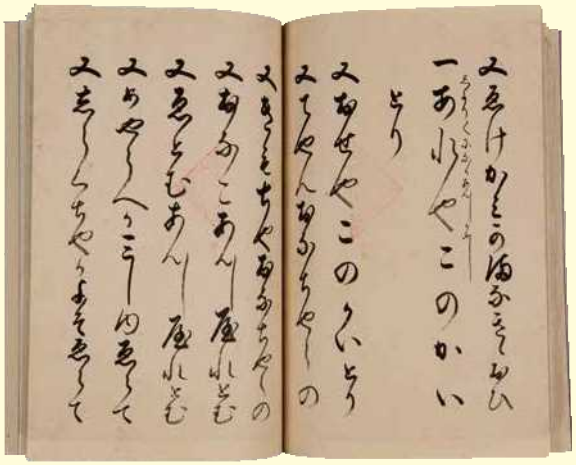
多くの人々が犠牲になり、美しい自然も破壊されました。文化財も同様で、戦前の沖縄県には建造物を中心に12件の国宝がありましたが、その全てが焼失・破損したのです。指定文化財以外では数多くの美術工芸品などが焼失したり散逸したりしました。現在、国や県が指定している文化財は、沖縄戦の戦禍をくぐり抜けてきた貴重な品々なのです。

1953（昭和28）年、沖縄の人々が喜ぶ出来事がありました。沖縄戦で焼失したと考えられていた『おもろさうし（尚家本）』と『中山世鑑』『中山世譜』「聞得大君御殿雲龍黄金簪」などが、ペルリ提督来琉100年を記念して、アイゼンハワーアメリカ合衆国大統領により返還されたのです。きっかけは、沖縄戦の最中、「おもろさうし」を持ち出したとされる元米軍人が、専門家に鑑定を依頼したことでした。それを知った関係者の尽力によって返還が決まったのです。

関係者などの証言によると、『おもろさうし』、『中山世鑑』、『中山世譜』、「聞得大君御殿雲龍黄金簪」などは元々、琉球国の世子の屋敷であった「中城御殿」に保管されていましたが、砲撃や空襲がひどくなってきた頃、堅固な地下排水路や壕の中に移されたようです。そうして隠されたものとしては、『おもろさうし』などの他に王冠や世子冠、国王の皮弁服の儀礼装束の一式、王妃の儀礼装束一式、中国皇帝から下賜された緞子等の未使用の反物、中国大家の書や絵画の軸物、冊封の儀礼や接待に使われた道具類、その他王府の儀礼や祭礼の道具類、中国伝来の古い陶磁器類、古伊万里の陶磁器類、壷屋焼の名品、御後絵という尚円王以下歴代国王の肖像画、御座楽の楽器一式、国王・王妃の黄金簪、その他盃などの黄金製品など貴重な文化財が数多くありました。ところがこれらは、敗戦後、すべて消えていたのです。『おもろさうし』などが返ってきたことを考えると他のものもアメリカなどにあるのかも知れません。

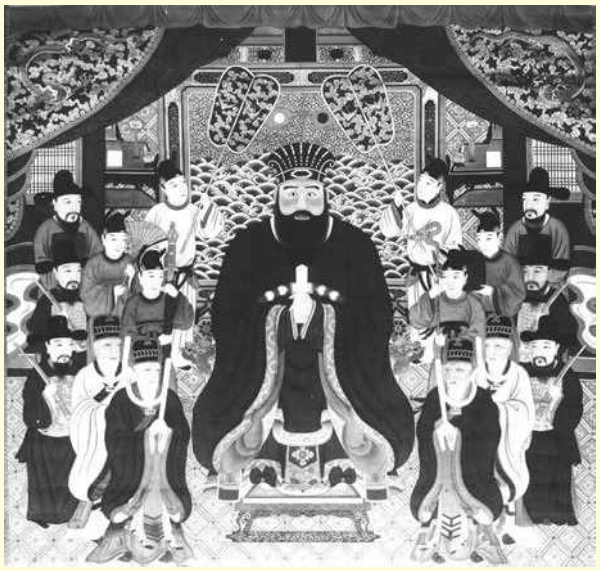
戦利品や記念品として持ち去られた文化財のことを「流出文化財」といいます。博物館や美術館、コレクターなどが、正規の手続きを経て海外に持ち出した文化財もそう呼ばれることがありますが、これらは性質の違(ちが)うものです。

存在が確認されていない文化財が幸運にも発見されて、故郷である沖縄県へ帰ることができるのなら、県民だけでなく、文化財にとっても幸せなことではないでしょうか。



おもろさうし

聞得大君御殿雲龍黄金簪



①御後絵（尚円王）鎌倉芳太郎撮影

②御後絵（尚育王）鎌倉芳太郎撮影

（写真提供：①～②沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館）